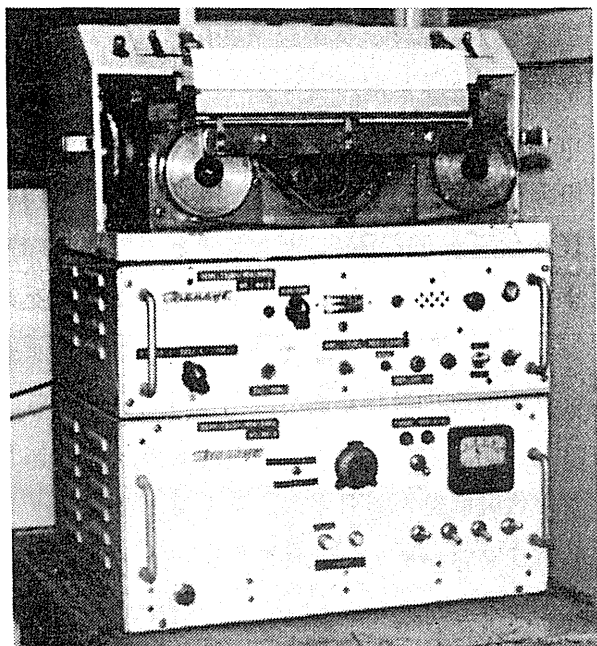
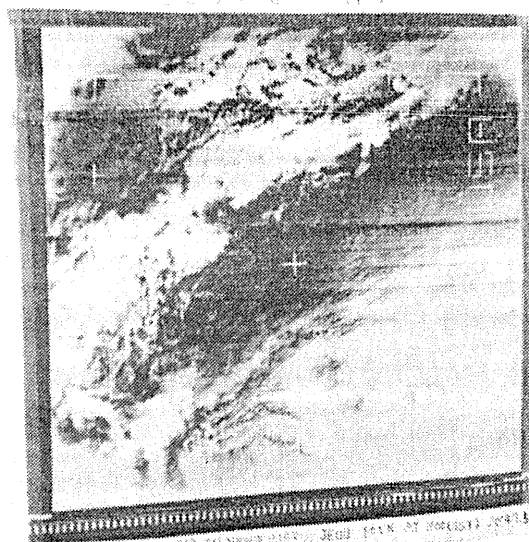


ファクシミリ (その5)



ESSA - 8 APT



走査方式 放電破壊記録
 記録紙 幅 257mm × 60m
 有効画面 252mm
 協同係数 268
 走査線密度 3.36ℓ/mm
 回転速度 240 rpm
 同期方式 水晶発振器制御
 独立同期方式
 電源 AC 100V
 製造者 昭和43(1968)年製(特注)

ESSAの仕様
です。

09^h 50^{min} 45^s (Sat.) 14TH Jan.
 1969 ON NICHIEIMARU/JEUU
 QTH AT1000 (JST)
 20° 47.5' N 130° 55' E

船舶又は航空機の航行を安全にするために利用する気象情報の提供も歴史を重ね、現在では気象衛星からの情報を含めて広く世界的に集められた資料に基づいて行われています。

わが国でこのような気象情報の放送が始まったのは昭和12(1937)年11月28日の次官会議の申し合わせによって気象協議会が設置され具体的に提案が討議されて翌昭和13(1938)年1月28

日気象通信実施方針が策定され、このときに中央気象台用設備が放送施設として新設されました。

この施設からの情報は昭和17(1942)年12月1日気象業務の送信所として開局した逓信省東京中央電気通信工事局・臼井無線分局〔昭和27(1952)年11月1日電信電話公社東京無線通信部臼井無線送信所と改称、昭和61(1986)年7月30

この部分は本機とは無関係で、
電本機はESSA受信のため
で特製したものです。

この施設からの情報は昭和17(1942)年12月1日気象業務の送信所として開局した通信省東京中央電気通信工事局・臼井無線分局〔昭和27(1952)年11月1日電信電話公社東京無線通信部臼井無線送信所と改称、昭和61年(1986)年7月30日廃局現在日本電信電話株式会社名崎無線送信所(昭和52(1977)年11月1日開局)で業務を引き継いでいます。〕から洋上船舶向けの気象情報及び一般新聞ニュースその他の放送が行われています。気象情報作成のための資料を提供する一翼を担う船舶局からの洋上気象情報も船舶数の減少また昭和40(1965)年初期の電波法改正に伴う無線部定員の減少その他の事情とも絡んで減少する傾向になってきました。ところで昭和39(1964)年末ごろから極軌道気象衛星が打ち上げられ始め、実用に供されるようになりしました。洋上の船舶がこれらの気象衛星から気象情報を直接入手できれば、例えば、台風の接近、前線の通過などの気象の急変を気象の定時又は臨時の放送を待つことなく即刻航行の安全のための資料として利用することが出来ます。写真の機器は洋上航行中の船舶で極軌道気象衛星から直接に気象情報のファクシミリ受信ができるように新たに設計し製作された装置で、一般商船などで気象衛星からの気象情報の受信実験を行い、今では行われていない南氷洋、洋捕鯨船での実験の結果は双方とも驚くほどの効果を受けています。これらの実験は世界でも最初の実用化のための実験で写真の機器が受信実験に使用した極軌道気象衛星及び船舶は次表のとおりです。

表1 気 象 衛 星 一 覧

※	衛 星 名	打ち上げ年月日	備 考
極	NIMBUS 1	昭和39(1964)年 8月28日	
極	ESSA 1	昭和41(1966)年 2月 3日	
極	ESSA 2	昭和41(1966)年 3月14日	
静	A T S 1	昭和41(1966)年12月 7日	実験対象
極	ESSA 6	昭和42(1967)年11月10日	〃
極	ESSA 8	昭和43(1968)年12月15日	〃
静	G M S 1	昭和52(1977)年 7月14日	〃

※ 極：極軌道衛星 静：静止軌道衛星

表2 ファクシミリ受信実験

実験船名	期 間	航路	対象衛星
日永丸	昭43. 8.31～ 昭43. 9.24	名古屋～ダバオ～東京	ESSA 6
日永丸	昭43.12.24～ 昭44. 1.14	新潟～ダバオ～東京	ESSA 6
日悠丸	昭44. 8. 1～ 昭44. 9. 5	下松～バリックバパン ～堺～下松	ESSA 6
日新丸	昭44.11. 3～ 昭45. 4.17	南氷洋捕鯨	ESSA 8
日鉦丸	昭45. 7.24～ 昭45. 8.31	水島～カーグ島～下松	ESSA 8

(臼井無線35年史、軌道気象衛星ハンドブック、衛星通信年報 参照)
(海上通信研究会資料、共同通信社の20年参照)